

2015 年度 明星大学心理相談センター活動報告

井出尚子・福島恵美 明星大学心理相談センター

I はじめに

明星大学心理相談センターは、1990 年に設置された人文学部心理・教育学科心理学専修附属の心理相談室を前身として、2001 年 12 月 8 日に大学に附設する機関として設立された。2002 年から、明星大学大学院人文学研究科心理学専攻臨床心理学コースが臨床心理士資格認定協会「第 1 種指定大学院」として認定されたことに伴い、地域に貢献する臨床の場、また大学院生の教育研修機関の場として、センターの更なる充実と発展が急務となり、2003 年からセンター専任の専門相談員 1 名、2004 年に 2 名、2005 年には 4 名が

スタッフとして加わった。現在、当センターは、事務職員 4 名の他、教員 6 名、専門相談員 4 名、実習指導員 2 名、また、指導のもとに活動している大学院生によって運営されている。

以下に、当センターにおける、2015 年度の活動の概要について報告する。

II 相談活動

1 面接形態

当センターでは、面接をその形態により分類し集計している。その分類と内容は表 1 の通りである。

表 1 面接形態

分類名称	含まれるもの	内容
個人面接	カウンセリング（成人）	子どもの心理的、発達上の問題について子ども自身への援助や保護者への助言（親子相談）と、主に成人以降の方を対象にしたカウンセリング
	親子相談	
集団面接	フリースペース：じゃんぼ	主に小・中学生の不登校の子どもたちへの居場所の提供及び集団を通じた援助
心理検査	様々な心理検査、発達検査	

2 面接回数

当センターでの 6 年間（2010 年度から 2015 年度）の、年間総面接回数の推移を表 2 に示した。それをグラフ化したものが図 1 である。

2010 年度から 2011 年度にかけては面接回数が減少しているが、これは、発達支援プログラムの中のグループソーシャルスキルトレーニングの

活動が 2010 年度末で終了したこと、面接を担当する大学院生の人数が減少したことによると思われる。また、2014 年度末をもって、発達支援プログラムのアセスメント外来は終了、学習支援は本学発達支援研究センターに移管となった。しかしながら、個人面接回数の増加により、面接回数は 2014 年度から再び増加の傾向にある。そのた

め、当センターのスタッフの業務量が上限に達し、2015年度の4月～6月、9月～12月は、新規申し込みについては受理面接可能な日時が空くまでウェイティングしていただく状態となり、1月～3月までは申し込みの受け付けを一時中止とする事態となった。

面接形態別の月別面接回数についてまとめたものが表3である。例年、夏季と冬季の休みに合わせて8月と1月に面接回数が減少する傾向があるが、2015年度は、1月の面接回数が他の月に比べて大きく減少することはなかった。

表2 面接回数の推移

内訳		年度	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
受理面接			91	80	84	82	90	64
個人面接	カウンセリング・親子相談		2,506	2,172	2,210	2,154	2,375	2,789
集団面接	フリースペース		42	52	10	24	13	11
心理検査			8	16	13	12	26	23
発達支援プログラム	学習支援・アセスメント外来・ソーシャルスキル※1		590	400	363	220	179	—
その他	コンサルテーション等		0	0	1	9	22	—
合 計			3,237	2,720	2,681	2,501	2,705	2,887

※1 ソーシャルスキル：2010年度末で終了

図1 面接回数の推移

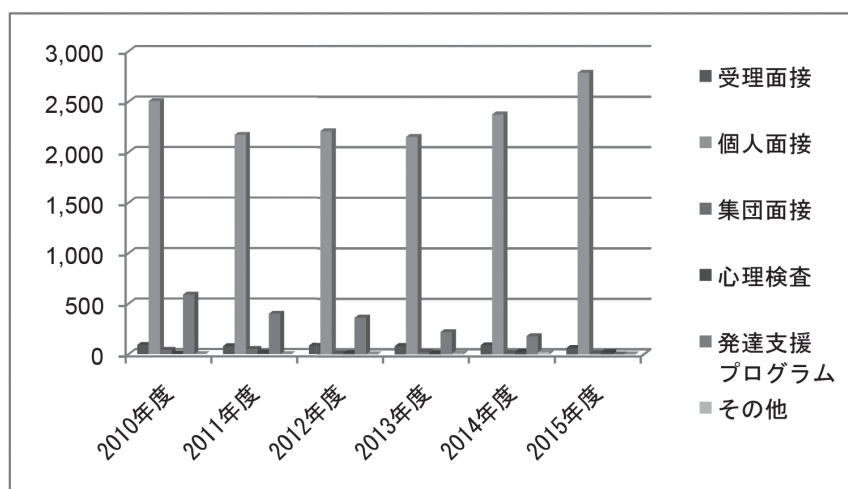


表 3 2015 年度 面接形態および月別面接回数

	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	合計
受理面接	6	6	10	2	4	2	14	4	8	3	2	3	64
個人面接	232	227	242	257	193	219	231	233	232	217	240	266	2,789
集団面接	2	1	0	0	1	0	0	0	1	1	3	2	11
心理検査	1	4	2	1	0	1	3	1	2	3	2	3	23
合計	241	238	254	260	198	222	248	238	243	224	247	274	2,887

3 来談者

2015 年度の新規来談者の受理面接回数を 2014 年度と比較して月別にまとめたものが表 4 である。申し込みのウェイティングや一時中止により、受理面接回数は前年度に比べて減少している。

2015 年度の新規来談者の年齢別・性別の内訳

を表 5 に示した。大学生・成人の相談が年々増加傾向にあるが、2015 年度は遂に全体の過半数を超えた。特に成人女性の申し込みが多くなっている。

新規来談者の来談経路を表 6 に示した。「学校からの紹介」に続いて、「知人からの紹介」「他機関からの紹介」が多い。

表 4 月別受理面接数

	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	合計
2015 年度	6	6	10	2	4	2	14	4	8	3	2	3	64
2014 年度	10	9	8	9	2	5	10	8	7	6	4	12	90

表 5 2015 年度 年齢別・性別相談件数（新規）

性別／年齢	就学前	小学生	中学生	高校生	大学生・成人	合 計
男	1	5	1	4	5	16
女	0	5	1	3	22	31
合 計	1	10	2	7	27	47

※親子相談の場合、親子で 1 件とする

表 6 2015 年度 来所経路（新規）

相談経路	件数
他機関からの紹介	9
学校からの紹介	13
相談員を知っている	3
相談に来ている人からの紹介	4
ホームページ・電話帳で知って	7
知人から紹介	10
その他	1
合 計	47

4 相談内容

18 歳以下の新規来談者の相談内容を表 7 に示した。「発達のかたより」と「不登校」の相談が多いのは例年どおりである。新規来談者数が減少したことと、新規来談者の内 19 歳以上の占める割合が大きくなっていることにより、18 歳以下の新規来談者は少なく、2015 度は特に中学生の

相談が少なかった。

19 歳以上の新規来談者の相談内容をまとめたものが表 8 である。「自分の生き方」について、「子どもの問題」の相談が多くなっている。近年の特徴として、既に成人した子どものことで相談に来る年配者が多くなっていることが挙げられよう。

表 7 2015 年度 相談内容別件数 18 歳以下（新規）

主 訴／年 齢	就学前	小学生	中学生	高校生	合 計
発達のおくれ	0	0	0	0	0
発達のかたより （高機能自閉症・アスペルガー・LD・ADHD 他）	0	2	1	3	6
不登校	0	3	1	2	6
集団不応	1	2	0	0	3
非行・暴力	0	1	0	0	1
神経症的症状	0	1	0	2	3
その他	0	1	0	1	2
合 計	1	10	2	8	21

表 8 2015 年度 相談内容別件数 19 歳以上（新規）

主 訴	2015 年度
子どもの問題（発達障害・不登校・問題行動・育て方など）	7
対人関係	2
家族関係	3
自分の生き方	8
神経症的症状	2
その他	4
合 計	26

Ⅲ スーパーヴィジョン

当センターでは、「研修員・研究員制度」を採用している。「研修員・研究員制度」とは、センター長の許可を得て、本学人文学研究科心理学専攻修士課程在籍者は「研修員」、博士課程在籍者および修士・博士課程修了生は「研究員」として当センターの在籍が認められ、当センターでの臨床活動に携わることができるという制度である。2015 年度の研修員・研究員在籍数は表 9 の通りである。

そして、研修員、研究員の当センターにおける臨床活動について、当センターの専門相談員がスーパーヴィジョンを行っている。1 回のスー

パーヴィジョンの時間はおよそ 50 ～ 60 分であり、セッションの記録を元に検討していく形式を採用している。

また、この他に卒後教育の一環として、修士・博士課程修了生および研究員が当センター外で行っている臨床活動についても、希望者には有料にて専門相談員がスーパーヴィジョンを行っている。

前者を「学内」、後者を「学外」として、表 10 に月別にスーパーヴィジョンの回数を示した。スーパーヴィジョンの回数は、面接回数の増加に伴い、近年増加傾向にある。

表 9 研修員・研究員在籍数

	人数
研修員	24 名
研究員	27 名
合計	51 名

表 10 研修員、研究員、修士・博士課程修了生に対するスーパーヴァイズ回数（1 回 50 ～ 60 分）

	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	合計
学内	37	37	59	52	37	41	44	41	42	42	46	56	534
学外	4	3	1	4	3	2	2	3	2	2	2	2	30
合計	41	40	60	56	40	43	46	44	44	44	48	58	564

Ⅳ 年間事業報告

2015年度に行われた事業を表11に示した。

「センター事業関係」にはセンターの運営に関わる事業を、「ケースカンファレンス・地域貢献関係」には各種ケースカンファレンスと地域に向けて開催された事業を載せている。

合同ケースカンファレンスは原則として毎月2回開催しているが、4月中はケースカンファレンスの代わりに「臨床オリエンテーション」を3回

にわたって開催している。「臨床オリエンテーション」は、特に大学院修士課程1年生に向けて、小グループでの討論形式を用いて、臨床活動を行う上での基本事項やケースの見方を身につけていくことを目的として実施している。また、その他に、外部講師を招聘してケース検討を行う特別合同ケースカンファレンスを年に数回開催し、ケースをより深く広く理解していくことを目指している。

表11 心理相談センター 2015年度年間事業・活動報告

	センター事業関係	ケースカンファレンス・地域貢献関係
4月	第1回センター会議 第1回研修員会議 センターガイダンス 臨床オリエンテーション① 臨床オリエンテーション② 臨床オリエンテーション③	センター便り第3号発行
5月	第2回センター会議 第2回研修員会議	第1回合同ケースカンファレンス 第2回合同ケースカンファレンス
6月	第3回センター会議 第3回研修員会議 運営委員会	第3回合同ケースカンファレンス 第4回合同ケースカンファレンス
7月	第4回センター会議 第4回研修員会議	第5回合同ケースカンファレンス 特別合同ケースカンファレンス (永井徹先生) 第6回合同ケースカンファレンス
8月	センター大掃除 玩具類下見・発注	第7回合同ケースカンファレンス
9月	第5回センター会議 第5回研修員会議	第8回合同ケースカンファレンス 第9回合同ケースカンファレンス
10月	第6回センター会議 第6回研修員会議 運営委員会	第10回合同ケースカンファレンス センター便り第4号発行 第11回合同ケースカンファレンス 公開講演会(坂上頼子先生)
11月	第7回センター会議 第7回研修員会議	特別合同ケースカンファレンス (菅野純先生) 第12回合同ケースカンファレンス

	センター事業関係	ケースカンファレンス・地域貢献関係
12 月	第 8 回センター会議 第 8 回研修員会議	第 13 回合同ケースカンファレンス 特別合同ケースカンファレンス (前田正先生)
1 月	第 9 回センター会議 第 9 回研修員会議	第 14 回合同ケースカンファレンス
2 月	第 10 回センター会議 第 10 回研修員会議 運営委員会 玩具類下見・発注	第 15 回合同ケースカンファレンス 特別合同ケースカンファレンス (伊藤研一先生)
3 月	第 11 回センター会議 第 11 回研修員会議 センター大掃除	第 16 回合同ケースカンファレンス 第 17 回合同ケースカンファレンス
年間	センター会議 11 回 研修員会議 11 回 運営委員会 3 回 センターガイダンス 1 回 臨床オリエンテーション 3 回 研究紀要 No9 発行 1 回 玩具類下見・発注 2 回 センター大掃除 2 回	合同ケースカンファレンス 17 回 特別合同ケースカンファレンス 4 回 公開講演会 1 回 センター便り発行 2 回

V おわりに

当センター設立から 14 年が経過し、その間にセンターのシステムや相談内容も変化してきた。設立当初より行ってきた発達支援プログラムのうち、「学習支援」は、2015 年度より新たに設立された発達支援研究センターに移管され、「アセスメント外来」については、十分に地域にリソースができ、先駆的に行っていた当センターの役割は果たしたと思われるため終了した。また近年、成人の相談が年々増加しており、その中には、長い病歴や医療機関での治療歴を持つ方も多い。更に、当センターに新規来談される方は、学校や医療機関、他の相談機関から紹介されて来る方が圧倒的に多い。当センターが大学院生の養成機関としてだけでなく、地域における相談活動を牽引する役割を求められていることを感じる。それらのニーズに応えるためには丁寧な臨床活動が必須

であろう。一方で、大学院生の養成についても、スーパーヴィジョンに関する調査研究、大学院生の受理面接陪席の試み、初心者に臨床に望む態度を身につけてもらうための「臨床オリエンテーション」、修了生その他機関でのケースのスーパーヴィジョン等、試行錯誤を繰り返しながら、より質の高い養成の在り方を模索し続けている。業務は繁忙を極め、相談の申し込みの受け付けを一時中止せざるを得ない事態も発生したが、大学院生の養成において、当センターがよりよい臨床を提供し続けることは重要なことではないかと考える。各人が臨床に真摯に向かう「場」であるからこそ、学ぶ者がよりよい臨床とは何かを掴んでいけるのではないだろうか。今後も多忙ながらも、地域に向けたよりよい臨床活動と大学院生の養成の在り方の向上と、その双方に向けて、たゆまぬ努力を続けていきたい。